現代の子どもの友人関係における特質―序論―

長　田　　勇・櫻　井　　誠

The Distinction of Today's Children's Friendship ―Isagogics―

OSADA Isamu and SAKURAI Makoto

キーワード：子どもの世界、友人関係、自律心

はじめに

子どもの世界は、世代間でかなりのちがいがある。とくに友人関係の意識の差が目立つ。それが昨今の「いじめ」あるいは「いじめ」自殺の多発要因にもなっている、といえるかもしれない。

私たち（長田、調査助手櫻井）は、2003年に「『少年の世界』……その世代間比較調査……」[1)]を実施し、当時の子どもたち（小5、中2、高2の男女）が友人関係にかなりナーバスになっているという結果を得ており、「自律性が脆弱化しているのではないか」との仮説を提示している。

本論は、2013年～2015年に予定している共同研究（他三名、計五名による）「現代の子どもの人間関係における特質と生徒指導のあり方に関する総合的研究」の前段階として、2003年の調査結果を再検討するとともに、子どもの友人関係に関する先行研究を概観しておくことを目的とする。

1　「少年の世界―世代間比較調査―」友人関係はどのように変わったか？

いまの子どもは以前に比べてどこか変わったであろうか？　2003年の調査を基にして、いまの子どもの状況を見てみる。

調査の概要は次のとおりである。

【調査仮説】

現在の子どもたちほどに友人関係に神経を使う世代は過去になかったのではないか？

【調査内容】

①調査地域＝岩手、栃木、東京、新潟、静岡、愛知、大阪、岡山、愛媛、熊本、沖縄の11都府県

②調査対象＝11都府県内の国公私立幼稚園、小学校、中学校、高校より、層化割り当て無作為抽出をおこない、調査協力を受諾いただいた学校、および、無作為抽出校とは別に特別依頼として高校で愛知1校、静岡1校、中学校で栃木1校＝合計36校

③調査対象者数：総計10,568人
内訳＝小学五年生（男女計）1,201人、中学二年生（同）983人、高校二年生（同）1,163人、同居の父2,683人、母2,919人、祖父673人、祖母946人（幼稚園父母祖父母含む）

④調査方法：託送調査、質問紙法（各世代同一内容調査。ただし、父母祖父母あての質問項目は過去形表現。各自の少年期の記憶を回答）

⑤有効票数：総計8,736票、有効回収率82.7%（内訳・小学生男女計894票、74.4%、中学生同691票、70.3%、高校生同924票、79.4%、父2,397票、89.3%、母2,705票、92.7%、祖父457票、67.9%、祖母661票、69.9%）

⑥調査期間：2003年2月から7月

⑦研究協力：櫻井誠、大嶺優（この二名には調査準備段階の資料収集から質問項目草案・集

計入力ソフト開発に至るまでの全過程で研究助手として力添えをいただいた）

以下の統計は、断りのない場合、すべて「危険率1%」でカイ二乗検定済みである（ただし、年代別の「20代」は、対象人数が少ないので検定不能。参考とする）。

（1）仲のいい友だちは多いか？

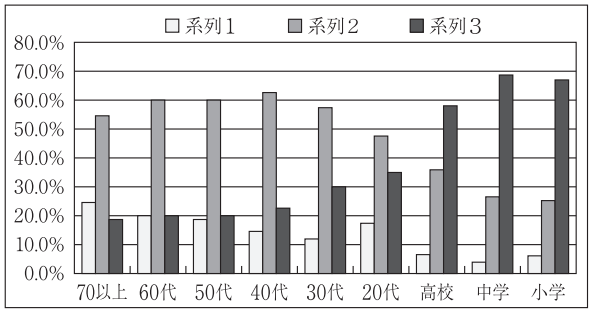
「仲のいい友だちは何人いますか？　一つだけ選ぶ。1.一人もいない　2.一人いる　3.二人いる　4.三～五人いる　5.六～九人いる　6.十人以上いる　7.その他」（父母祖父母へは「中学生の頃、……何人いましたか」）に各世代はどう答えたか。

この問いは、単なる「友だち」についてではなく、また、最近はほとんど死語に近くなった「親友」という言葉を使っているのでもなく、一番わかりやすい「仲のいい友だち」について尋ねているのである。結果は表1のとおりで、「十人以上」という回答が年齢が若くなるにつれてぐんぐん増え、小中学生では半数近くになっている。この点は先行研究でも多く指摘されているところだ（総務庁『日本の青少年の生活と意識』1996など。後述）。

（表1）＜仲のいい友人数＝年代別＞
（「無答」は除外。「その他」は表示略。以下同じ）

年代別	いない	一人	二人	三~五人	六~九人	十人以上	総計人
70以上	1.8%	7.3%	14.9%	54.5%	9.7%	8.9%	495
60代	1.4%	2.9%	14.8%	60.1%	10.9%	8.6%	514
50代	1.4%	4.5%	12.7%	60.2%	10.1%	9.9%	575
40代	1.3%	3.2%	10.5%	62.1%	12.6%	9.9%	2,609
30代	1.3%	2.0%	8.4%	58.2%	16.1%	13.5%	1,887
20代	0.0%	3.2%	14.9%	46.8%	12.8%	22.3%	94
高校生	1.3%	2.2%	2.9%	33.6%	25.8%	32.0%	917
中学生	0.7%	0.7%	2.5%	25.8%	23.5%	45.1%	685
小学生	0.7%	2.0%	3.8%	24.8%	20.4%	46.3%	888

（図1）＜仲のいい友人数＝年代別＞



上の図1は、前表1を「二人以下」（系列1）、「三～五人」（系列2）、「六人以上」（系列3）に整理してグラフ化したものである。30代以上では「三～五人」が圧倒的に多いが、高校生以下では「六人以上」が激増して「三～五人」をはるかにしのぐ。しかも、「二人以下」がぐんと減る。

では、休日に友だちと一緒にいることは、上に比例して多くなっているのか？　それを見たのが次である。

（2）友だちと一緒にいることが多いか？

「休日は友だちと一緒にいることが多いですか？　一つだけ選ぶ。1.ほとんど一緒　2.一緒のほうが多い　3.半々くらい　4.一緒のほうが少ない　5.一緒にはいない　6.その他」（父母祖父母へは「子どもの頃」とした）

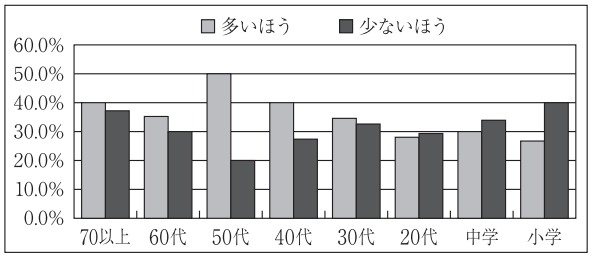
表2は、「1＋2＝多いほう」「3＝半々くらい」「4＋5＝少ないほう」に整理した結果である。高校生は通学区との関係があるので、ここでは表示を省いた。

（表2）＜休日は友人と一緒＝年代別＞（「6.その他」略）

年代別	多いほう	半々	少ないほう
70以上	39.1%	28.7%	26.7%
60代	35.2%	28.6%	29.6%
50代	49.0%	30.5%	18.8%
40代	39.3%	33.5%	26.1%
30代	33.3%	34.7%	31.3%
20代	27.7%	42.6%	28.7%
中学	29.7%	35.9%	33.6%
小学	26.1%	33.0%	40.2%

「多いほう」と「少ないほう」を比較して図示してみる。

（図2）＜休日は友だちと一緒＞

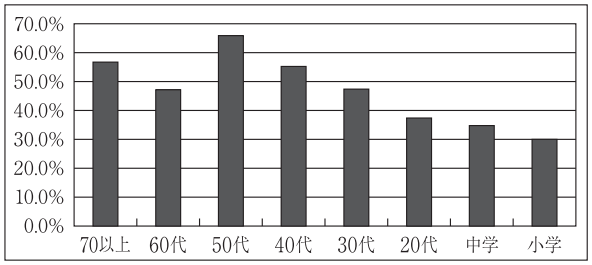


友だちが多いのなら休日に友だちと一緒にいる機会も多くなるはず、と考えられるが、実際はそ

ういう傾向にはならない。むしろ、「多いほう」は世代が若くなるにつれて減少する。

つぎの図３は、「仲のいい友だち」が六人以上いる人で「休日友人と一緒が多いほう」である場合をグラフ化したものである。右肩下がりが明瞭に見える。

（図３）＜友人六人以上と休日一緒「多いほう」＞



仲のいい友だちがたくさんいると自覚している人の多い現子ども世代なのだが、休日に一緒にいる頻度は旧子ども世代よりも少ない。

しばしば、「今の子どもは、友人関係は広いが浅い」あるいは「こういうときは誰々と、別の時は誰々と、というように選択的になってきている」という指摘があるが、この現象はそういう「つきあい形態」の問題であろうか？

（３）学校での友人関係は？

友だちを作る場として学校は大きな比重を占めるとともに、友だちと一緒にいられるからこそ学校に通うことが楽しい、ということもありうる。実際のところ、子どもは学校では何を楽しく感じているのだろうか？

「学校にいるとき、次のどれを楽しいと思いますか？　いくつ選んでもいい。1. 好きな科目の授業　2. 友だちと話したり遊んだりすること　3. クラブ・部活動　4. 先生と話すこと　5. 昼食　6. ホームルーム・学級会　7. 運動会などのスポーツ行事　8. 学芸会・文化祭などの行事　9. 楽しいことは何もない　10. その他」（父母祖父母へは「小中学生時代」とした）

このうち、どの世代でも多かった上位四つ（「1 好きな授業」「2 友だち……」「3 クラブ……」「7 運動会……」）を次表に示す。

（表３）＜学校で楽しいこと＝年代別＞

年代別	好きな授業	友だち	クラブ	運動会	総計
70 以上	42.5%	56.9%	7.9%	38.4%	508
60 代	43.6%	61.1%	25.1%	34.2%	514
50 代	44.4%	69.2%	37.4%	34.8%	577
40 代	43.8%	81.3%	49.1%	35.4%	2,620
30 代	41.7%	85.0%	51.5%	39.2%	1,888
20 代	41.5%	86.2%	44.7%	33.0%	94
高校	25.0%	85.6%	27.1%	40.0%	923
中学	44.7%	85.7%	49.2%	45.3%	691
小学	54.1%	85.6%	51.0%	37.3%	893

どの年代でも「友だちと……」が一番多いが、60 代以上の約４割以上はそれを選択していないことは注目すべきである。友人関係にある程度の距離を置いていた（生活の重心が友人関係にはない）ようだ。

では、学校でいやなことは何か？

「学校にいるとき何がいやですか？　いくつ選んでもいい。1. きらいな科目の授業　2. つきあいで友だちと話したり遊んだりすること　3. いじめられること　4. 先生のこと　5. クラブ・部活動　6. 昼食　7. ホームルーム・学級会　8. 運動会などの行事　9. 学芸会などの行事　10. いやなことはない　11. その他」（父母祖父母は「小中学生時代」のこととした）

このうち「1 きらいな授業」「2 友だちづきあい」「3 いじめられること」「10 いやなことはない」の年代比較を示す。

（表４）＜学校でいやなこと＝年代別＞

年代別	授業	友だち	いじめ	何もない	総計
70 以上	41.3%	3.4%	7.3%	42.3%	494
60 代	47.6%	2.0%	7.3%	36.0%	506
50 代	59.6%	3.0%	5.9%	24.4%	574
40 代	61.0%	3.6%	10.7%	22.7%	2,605
30 代	59.0%	4.4%	13.9%	20.7%	1,876
20 代	57.0%	7.5%	12.9%	20.4%	93
高校	78.2%	9.7%	6.6%	8.1%	918
中学	72.4%	8.7%	10.0%	13.1%	688
小学	63.6%	4.6%	20.5%	21.5%	888

「つきあいで友だちと話したり遊んだりすること」が「いや」であるのはどの世代でも一割に満たないが、現中高生は 30 代以上の約２倍である点は特筆すべきところである。なぜか？

「学校で楽しいこと」が「友だちづきあい」で

あるのに、「学校でいやなこと」も「友だちづきあい」である、というケースを見てみる。

（表5）＜楽しいこと「友人」：いやなこと「友人」＝年代別＞

年代別	友＝いや	総計
70 以上	3.9%	280
60 代	2.6%	309
50 代	2.0%	396
40 代	2.7%	2,114
30 代	4.0%	1,595
20 代	7.5%	80
高校	7.9%	787
中学	7.5%	589
小学	3.8%	759

上表は、「楽しいこと」として「友だち……」を選んだ人（表内総計数）のうち、「いやなこと」として「つきあいで友だちと……」を選んだ人の割合である。

カイ二乗検定では、年代別「友＝いや」の個数がとくに祖父母世代に少ないので、危険率1%あるいは5%での有意差は出ない。しかし、「祖父母、父母、子ども」という世代別にまとめて処理すると、危険率5%で差が有意となる。それを見たのが、次表6である。

（表6）＜同前＝世代別＞

世代別	友＝いや	総計
祖父母	2.9%	646
父母	3.3%	4,128
子ども	6.3%	2,135

「友だち……」を楽しいと思う人が同時に「つきあいで友だちと……」をいやに感じている、という傾向が現子ども世代に突出している。

「好きなヤツもいれば、嫌いなヤツもいる」というのは当たり前のことだが、それは、「友だちづきあい」が「学校でのいやなこと」という次元とは別の話である。学校に行けば、ある範囲の友だちづきあいは楽しいが、ある範囲（あるいは、同じ範囲か？）の友だちづきあいをいやに感じるというのは、現子ども世代が友人関係にかなりナーバスになりがちである、ということを物語るのではないか。

次の問いでもそれを見ることができる。

（4）かかわりたくない人はいるか？

「そばに来ないでほしい、とあなたがいつも思う人は誰かいますか？　いくつ選んでもいい。1. 父　2. 母　3. 祖父　4. 祖母　5. 兄弟姉妹の誰か　6. 友だちの誰か　7. 自分をいじめる子　8. 知っている女の子の誰か　9. 親戚のある人　10. 近所のある人　11. 学校のある先生　12. その他　13. そういう人はいない」（これは男性への問い。女性へは「8」が「男の子の誰か」となる。以下、同様。父母祖父母へは「子どもの頃」とした）

年代別に処理すると、個数の少ない年代があって有意検定が不能になるので、世代別にまとめた。その結果が次表である（危険率5%で有意）。「1 父」「2 母」「6 友だちの誰か」「7 自分をいじめる子」「11 ある先生」だけを示しておく。

（表7）＜そばに来ないで＝世代別＞

世代別	父	母	友だちの誰か	いじめる子	ある先生	総計
祖父母	3.4%	0.3%	7.8%	14.2%	5.9%	1,050
父母	6.6%	1.4%	9.9%	15.3%	8.8%	4,976
子ども	8.1%	3.0%	21.6%	14.8%	18.2%	2,477

自分を「いじめる子」は各世代でほぼ同じであるが、「友だちの誰か」が現少年世代に突出的に多い。

次表8は、前の問いにあった「学校では友だちづきあいが楽しい」「学校では友だちづきあいがいや」を選んだそれぞれの人が「友だちの誰かそばに来ないで」を選んだ割合である。

（表8）＜「友＝そばに来ないで」との関係＝世代別＞

世代別	友＝楽しい	友＝いや	総計
祖父母	6.8%	3.7%	82
父母	9.8%	24.5%	493
子ども	21.0%	48.4%	535

表8から何が見えるか？

いずれの場合も現子ども世代の比率が高い。とくに「学校でいやなこと＝友だちづきあい」と思う人が「友だちの誰かそばに来ないで」と思う、という比率が他世代よりも極端に高い（この場合の「友だち」には単なるクラスメートも含んでい

るはず)。

「そばに来ないで」というのは、「つきあい」への拒否感である。その拒否感を何らかの形で相手に示しうるなら、友人関係が選択的になる。「この人とはつきあうが、この人とはつきあわない」という関係がある程度は確立される。そうすると、「友だちづきあいがいや」という受け身の心理も生まれない。そもそも、「そばに来ないで」という気持ちも働かない。つまり、自律心（自分は自分だ、という精神性）の問題である。

自律的であればあるほど、まわりは気にならない。子どもが何十何百もいる教室・学校という空間でも、選択的でいられるから、他者との心理的な距離をコントロールしうる。学校の中で友人関係に意識がとらわれることもない。他者とは適度に距離をおくこともできる。そういう視野から見ると、現子ども世代は自律心が脆弱な状態ではないか、と見えてくる。

この傾向は、つぎでも見られる。

「友だちから電話がかかってきたら（相手が誰かわかる場合)、すぐに出ますか？　一つだけえらぶ。1. 相手が誰でもすぐに出る　2. ある人の場合はときどき出ない　3. ある人の場合は絶対に出ない　4. その他」(父母祖父母へは「子どもの頃」とした)

（表 9）＜電話に出るか＝世代別＞

世代別	1	2	3	総計
祖父母	47.0%	4.8%	0.9%	978
父母	88.6%	5.1%	0.8%	5,054
子ども	74.8%	18.6%	3.8%	2,474

現子ども世代は、「ある人の場合はときどき出ない」「絶対に出ない」が他世代よりもかなり多い。「居留守をつかう」ということが拒否行動であるとすると、「ナーバス」という批評よりも、「深刻な状況」と見るべきであろう。

「何かをするとき、友だちにどう思われるか、ということが気になりますか？　一つだけ選ぶ。1. たいてい気になる　2. 気になるほうが多い　3. 半々くらい　4. 気になるほうが少ない　5. 気にならない　6. その他」(父母祖父母へは「子どもの頃」とした)

「1 ＋ 2」を「気になるほう」、「4 ＋ 5」を「気にならないほう」として示す。

（表 10）＜友だちの視線＝年代別＞

年代別	気になるほう	半々	ならないほう	総計
70 以上	17.1%	18.0%	64.5%	490
60 代	20.3%	21.5%	57.5%	508
50 代	22.2%	27.1%	49.7%	572
40 代	28.5%	33.0%	38.2%	2,612
30 代	39.0%	33.2%	27.7%	1,882
20 代	35.5%	33.3%	31.2%	93
高校	49.9%	31.3%	18.3%	922
中学	43.1%	36.1%	20.8%	687
小学	37.2%	33.8%	28.6%	887

「そばに来ないで」と内心では選択的でありながら、その対象が同じであってもなくても、「つきあいがいや」と思いつつも、つきあわざるをえない状況を生んでいる。したがって、つねに受け身の心理状態に陥る。友人関係の距離感がつかみにくくなる。それが、一方では、仲のいい友だちが 10 人以上もいるという意識に（おそらく）つながっていくのではないか。すなわち、友人関係が「広く浅い」という「つきあい形態」の問題よりも、友人関係が「受身的」で「距離感があいまい」というところから友人数が膨れ上がるのではないか。

しかし、そのことよりも、もう一方では、「いやだ」という選択的な拒否感が行動に連動していかないという自律心の脆弱性を物語る。そこに、他世代よりも友人関係にナーバスになる要因が見える。

（5）学校は楽しいか？

現子ども世代が学校をどう感じているのかは、予想がつく。

「ふだん（病気や悪天候などの特別の日以外で）『学校に行きたくない』とよく思いますか？　一つだけ選ぶ。1. よく思う　2. ときどき思う　3. 一二度は思った　4. 思ったことはない　5. その他」(父母祖父母へは「子どもの頃」とした)

まず、世代別に示す。

（表 11）＜学校に行きたくないと思う＝世代別＞

世代別	よく	ときどき	一二度	ない	総計
祖父母	4.4%	16.2%	17.4%	61.0%	1,103
父母	6.1%	25.3%	32.3%	35.8%	5,066
子ども	17.1%	34.2%	30.6%	17.5%	2,489

「よく思う」人は、現子ども世代で突出する。「ときどき」を加えると 50%を超える子どもが学校に行きたくないと思うことがある、ということだ。

年代別を示しておく。20 代から急増する。

（表 12）＜同上＝年代別＞

年代別	よく	ときどき	一二度	ない
70 以上	3.0%	16.4%	12.7%	67.3%
60 代	5.2%	15.3%	19.9%	57.8%
50 代	4.9%	21.3%	28.0%	45.3%
40 代	5.1%	24.2%	33.0%	37.2%
30 代	7.3%	27.7%	32.9%	31.7%
20 代	16.0%	29.8%	26.6%	26.6%
高校	21.9%	39.6%	26.3%	11.6%
中学	16.9%	32.6%	32.6%	17.4%
小学	12.2%	30.0%	33.5%	23.7%

この傾向は学校の成績と相関するか？

「学校の勉強は（科目にもよるが、全体としては）できるほうだ、と思いますか？　一つだけ選ぶ。1. できるほう　2. ややできるほう　3. 中くらい　4. ややできないほう　5. できないほう　6. その他」（父母祖父母へは「小中学生時代」とした）という問いの結果との相関を見てみる。

（表 13）＜成績と「学校に行きたくない」との相関＝世代別＞

		学校に行きたくない			
世代別	勉強	よく思う	ときどき	一二度	ない
祖父母	できるほう	1.9%	9.2%	15.2%	73.6%
	中くらい	2.7%	17.3%	20.8%	57.7%
	できないほう	13.3%	26.0%	12.2%	48.0%
父母	できるほう	3.4%	21.0%	33.1%	42.2%
	中くらい	5.0%	24.3%	35.0%	34.9%
	できないほう	11.9%	34.1%	26.3%	27.5%
子ども	できるほう	12.3%	29.5%	34.8%	23.1%
	中くらい	14.5%	35.0%	31.4%	18.4%
	できないほう	25.1%	37.4%	25.8%	10.9%

勉強ができるほうであるなら学校逃避感は弱いと思われるが、現子ども世代では「できるほう」と思っている人でも「学校に行きたくないとよく思う」割合が前の世代よりもかなり多い。

次の表は、勉強が「できるほう」の人で「学校では友だちづきあいがいや」と思う人のうち「学校に行きたくない」と思う割合を示したものである（祖父母は個数が少ないので割愛。危険率 5%で検定済み）。

（表 14）＜勉強、友だちづきあい、学校行きたくない、の相関＝世代別＞

勉強はできるほう	学校では「友だちづきあいがいや」のうち学校に行きたくないと思う				
	よく思う	ときどき	一二度	ない	総計
父母	5.5%	27.5%	33.0%	34.1%	91
子ども	27.0%	41.3%	22.2%	9.5%	63

勉強が「できるほう」で「学校に行きたくないとよく思う」子どもは表 13 では 12.3%であったが、「友だちづきあいがいや」にかぎって見てみると 27.0%に増える。

友人関係がいまの子どもに重圧となってのしかかっている。どう解決するか？家庭や学校教師の力で解決できるか？

「自分は自分だ」という意識が弱いとは、どういうことか？　「他と異なることへの恐れ」である。その恐れが強くなれば、必然的に「友だちにどう思われるか」は気になる。気になるから、さらに恐れる。気になるから、だれかの何かに「差異」を見いだしたくなる。そして、排除したくなる（いじめである）。

だから、その「恐れ」自体を消す方向でおとなは子どもに働きかける必要がある。どうするか？それが来年度以降に予定している私たちの調査の重要項目になる。

（長田）

2　現代の友人関係の特質と自己

この 2 は、前章の内容を他者の研究の文脈に位置づける形で先行研究を概観し、今後の課題を見出すことを目的とする。

（1）友人数の増加と友人関係の「楽しさ」と「つらさ」

現代における子どもの友人関係の特徴として、多くの調査が親友や友人の数の増加を挙げている。

前章で述べたとおり、2003年の長田の調査「『少年の世界』……その世代間比較調査……」（以下「長田調査」）でも、「仲のいい友だち」の数が「3～5人」なのは現代の中学生では25％であるのに対し、その父母祖父母世代では60％前後であり、「10人以上」であるのは中学生では45％なのに対し、その父母祖父母世代では10％前後となっていた。

四宮晟の1951年における高校生（2003年時には69歳前後）を対象にした調査では、友だちの数は「校内に平均3～4人」「校外に平均1～2人」としており[2)]、長田調査の結果は妥当な数であると考えられる。

また、NHK世論調査部の中学生と高校生を対象にした調査では、「親友」が3人以下の割合は1982年には5割を占めていたが、1992年では4割以下と減少しており、「親友」が10人以上の割合は1982年には15％であったものが、1992年では27％と増加している[3)]。

友人数の増加傾向は、いわゆる「広く浅い友人関係」や「友人関係の希薄化」として1990年ごろから指摘されている。このような「友人数の増加＝友人関係の希薄化」は友人関係の拒絶を連想させるが、学校における友人関係はいつの時代も「楽しいこと」として認識されており、むしろ現代になるに従ってその傾向が強くなっている。

長田調査でも、「学校にいるとき、楽しいと思うこと」として「友だちと話したり遊んだりすること」を選択しているのはどの年代でも最も多く、とくに現代の小学生、中学生、高校生とその父母世代である40代以下では80％以上が選択していた。ただし、50代以上になるにつれ微減していくが、楽しいことの一番であることにはちがいはない。先にあげた四宮晟の1951年における調査でも、「学校に来て最も楽しいもの」として、「友人と話しが出来る」が最も多かったのである[4)]。

したがって、現代の子どもの友人関係は、友人の数は増えていても、過去の世代と同様に良好であるように見える。ところが、そうは単純にいえない面がある。

たとえば、中島喜代子らの高校生とその保護者を対象にした調査（2006年）では、学校における心理状態としての「不安を感じる」「いらいらする」「つまらない」「不満がある」「圧迫感を感じる」などにおいて、子ども世代のほうがマイナスの心理状態の割合が高いとしている。また、「友達との関係」において「本音で会話」は両者に差はないが、「表面上の会話」「気をつかう」が子ども世代で有意に多いという結果を示している[5)]。

長田調査では、「学校にいるとき何がいやですか」という設問において、「つきあいで友だちと話したり遊んだりすること」を選択したのは、現代の中学生・高校生では9％前後であるが、父母世代では4％前後、祖父母世代では2～3％であった。

このように、現代の子どもの友人関係において、とくに学校での友人関係においては、楽しさと同時に、不安や緊張、ストレスなどの背反した感覚が過去の世代と比べて大きく存在していることがわかる。

学校での友人関係のストレスに対応するように、先の中島喜代子らの調査では「休日の過ごし方」は、「一人でのんびりする」は子ども世代がやや多く、「友達と遊びに行ったり、しゃべったりする」は親世代がやや多かったとしており[6)]、学校外では友人関係を避けている傾向もみられる。

その点は長田調査でも同様で、「休日は友だちと一緒にいることが多いか」については、小中学生ではあるが、「多いほう」より「少ないほう」が上回っていた。

友人数は増加しているはずなのに、中島と長田の調査結果はそれとは逆の側面を映し出している。長田は、この点について「過去の子ども世代

よりも現代の子どもは友人関係にナーバスになっている」という結論を出していたが、今後、より詳細な調査が必要になってくる。

（2）友人のグループ化傾向とその特徴

藤田英典らの小中学生を対象にした調査がある。現代における友人関係の特徴として「グループ化」とその特徴についての調査であるが、友人数の増加とは相反するように、友人グループは少人数化の傾向にあるようだ。

「3人～5人の小グループ」は1986年の調査での36％から、1988年の45％、1995年の49％と増加傾向にあり、一方「10人以上の大グループ」は1986年の調査での20％から、1988年の18％、1995年の5.7％と減少傾向にあるとしている。また、「友人グループはない」としている割合が1986年と1988年の調査で5％前後であったものが、1989年では8.8％、1995年では15％となり、特定の友人グループをもたない子どもが増えてきているという結果が出ている[7)]。

藤田らは、グループ化状況での友人関係の特質として、「グループの規模が大きいほど交遊活動が活発な傾向」「とりわけ女子の友人グループは閉鎖化する傾向」「グループに入っていない子などは、友人関係における疎外や齟齬の経験が多い」「グループの規模が小さい方が、友人関係の齟齬が多い」の四つを挙げている。とくに規模の小さいグループは閉鎖化・濃密化する傾向があり、「固定性や濃密性、閉鎖性といった特質は、その関係に軋轢や葛藤の契機を胚胎しており、それは集団の規模が小さいほど顕在化・深刻化しやすくなる」[8)]という考えを示している。

つまり、グループの小規模化が経年で進行しているのなら、友人関係の齟齬の機会が多くなっているといえる。ここでも、現代の友人関係のつらさ、不安定さが見える。

上の（1）（2）の調査から見られる現代の友人関係の特質は何か？

友人数が増加しているが、その友人関係の「楽しさ」は過去の世代と比較しても小さくなっておらず、一概に「希薄化」とは表現できない部分はある。しかし、「楽しさ」の一方で、「休日は一人で過ごす」や「グループに入らない」など友人関係を避ける傾向やグループ化とその中でのストレスもみられ、友人関係での「つらさ」も増大しているようにも見える。

「楽しさ」と「つらさ」のはざまで子どもたちは生きているようだ。その両面はどんな人の人間関係にも見えることではあるが、成長途上である子どもであるがゆえに、その両面のどちらに重みを感じてしまうかが問題である。長田調査によれば、60代以上の4割以上は友人関係にある程度の距離を置いていた（生活の重心が友人関係にはない）ようであった。しかし、友人数が多いと自覚している現代の子どもでは、友人関係が生活の重心に位置づいてしまうのではないか。だから、意識的な「友人回避」が現れる。よりつらくなる。現代の子どもの自我構造（アイデンティティ）が問題になってくる。

（3）友人関係の中での自己

このような現代の友人関係の中での自我構造はどのようなものであろうか。

小中学生の人間関係は学校で形成される少数で特定の友人関係を基盤としており、その中での連携や信頼関係を基にして自己評価や自尊感情（自我）は形成・修正されていく。他方、友だちからのまなざしや評価を意識・志向することで、自我の再編をしている。

前述したように、友人数の増加傾向は「友人関係の希薄化」「友人との心理的距離の遠さ」「限定的な友人関係」と関連づけてとらえられることが多く、このような関係性について教育現場では、アイデンティティの拡散や自我の未確立という側面で問題視されてきた。しかし、辻大介はこれとは異なる解釈をする。

2004年の辻の調査によれば、「心の深いところは出さずにつきあう」といった傾向は強まっておらず、対人関係での充実感はむしろ高まってお

り、状況によって友人関係を切り替える対人関係のあり方が強まってきているという。これを「対人関係のフリッパー志向」[9] と名づけている。

従来の「広く浅い対人関係（部分的で表層的な対人関係）」「狭く深い対人関係（全面的で親密な対人関係）」のような二元的に対立する構造として友人関係をとらえるのではない。より多元的な構造としてとらえることで新しい親密性の形であるとする「部分的だが表層的でない対人関係」が存在する、と辻は示唆している。

この新しい対人関係から構成される自我の構造は、従来のような単一の自我ではなく、複数の自我がゆるやかに束ねられた自我構造「多元的な Identities」[10] であると辻は見る。このような多元的なアイデンティティ（複数の自我の並列）は従来から想定されてきたようなアイデンティティの拡散（自我の未確立）とは区別されるものとし、多元型のアイデンティティを有する者はそうでない者と比べて、対人関係における満足感、被理解感・信頼感も平均以上であるという。

このような複数の自我をまとめ、状況によってつきあう友人を切り替えるというのは、強い自己が積極的に多くの友人とつきあい、安定した良好な友人関係ができている状態と考えられ、前項で示した友人関係における「楽しさ」の側面を連想させる。

一方で、岡田努は調査から、現代青年の友人関係のあり方として、「群れて表面的に楽しい関係を維持する群」「対人関係を回避する群」「内面的対人関係を維持する従来の青年に近似した群」の三つに分類している[11]。さらに、「表面的に楽しい関係を維持する群」は一方で他者からの評価に敏感で、自尊感情が安定せず、「対人関係を回避する群」は自尊感情が低い、といった友人関係と自尊感情の維持との関連を示唆している[12]。

また岡田は、「友だちの気分を害するようなことを言わないようにする」といった“相手を傷つけたりする不安から防衛的な行動をとる”という因子を抽出し、「傷つけ回避」と命名している[13]。さらに、「友人から傷つけられることを回避する」ことが、自尊感情を維持させることにつながっているという分析結果を示している。

この「傷つけ回避」の心理は、辻の「状況によって友だちを切り替える」という視点とは逆で、友人関係での不安定さや「つらさ」の側面を表しているといえる。

長田調査によると、「何かをするとき、友だちにどう思われるか、ということが気になりますか」という項目において、「気になるほう」と回答した割合が現代の中学生では 43％であったのに対し、その父母世代の 40 代では 29％、祖父母世代では 20％前後となっていることと関連して、現代の子ども世代における自律心の弱さを仮説的に指摘した。

友だちのまなざしと自我に関する調査として、先にあげた藤田英典らは、「よその人に感謝されることがある」「友だちに頼りにされている」といった「関係的自己評価」に関わる項目と、「自分の短所が気になる」「服装や髪形に気を使う」といった「まなざし意識」に関わる項目で相関があることを示している[14]。

今後は、こういう自律心とまなざしとの関係性に焦点を定めた研究も必要になってくるが、友人関係のプラス面とそれとは背叛するマイナス面の理論整理は早急におこなわれなければならない。それが今後の私たちの研究の第一課題である。

（櫻井）

注

1）　詳細は、長田勇・遠藤忠「世代間比較調査『少年の世界』：友人関係意識の現状と学校教育の課題」（宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要第 30 号、2007 年）を参照されたい。

2）　四宮晟「『高校生の社会生活』第一報告：友人構造について」研究紀要（千葉大学）第 1 号、1951 年、p.26

3）　NHK 世論調査部『現代中学生・高校生の生活と意識』1982 年、1987 年、1992 年

4）　前掲、四宮、p.26

5)　中島喜代子・小長井明美・木屋真依「世代間比較からみた子どもの居場所に関する研究―個人的居場所の場合」三重大学教育学部研究紀要第57号、2006年、p.72
6)　同上、p.68
7)　藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳「小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究：全国9都県での質問紙調査の結果より」東京大学大学院教育学研究科紀要第36号、1996年、p.108
8)　同上、p.112
9)　辻大介「若者の親子・友人関係とアイデンティティ：16～17歳を対象としたアンケート調査の結果から」関西大学社会学部紀要第35号、2004年、p.158
10）同上、p.151
11）岡田努「現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成：傷つけ合うことを回避する傾向を中心として」金沢大学人間科学系研究紀要第4号、2012年、p.19～p.34
12）同上、p.20
13）同上、p.24
14）前掲、藤田英典ら、p.120

長田　勇（埼玉東萌短期大学教授）：「はじめに」と1を担当
櫻井　誠（三重大学大学院生）：2を担当